

都道府県名	徳島県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	藍住南小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	3	3	3	3	3	1	20	24
児童数	111	110	102	88	108	91	6	616	

研究の概要

1. 研究主題

確かな学力を育てる学習指導のあり方

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

<p>学年 5年生・6年生 算数 教科担任制</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの理解度に差がでやすい教科であり、小学校の仕上げの段階として学力の定着がより重要と考えられるため。 <p>学年 全学年 算数</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全国かつ総合的な学力調査の実施に係る研究指定校として、各学年の算数科全単元の目標の実現状況を把握する研究をすすめているため。

(2) 年次ごとの計画

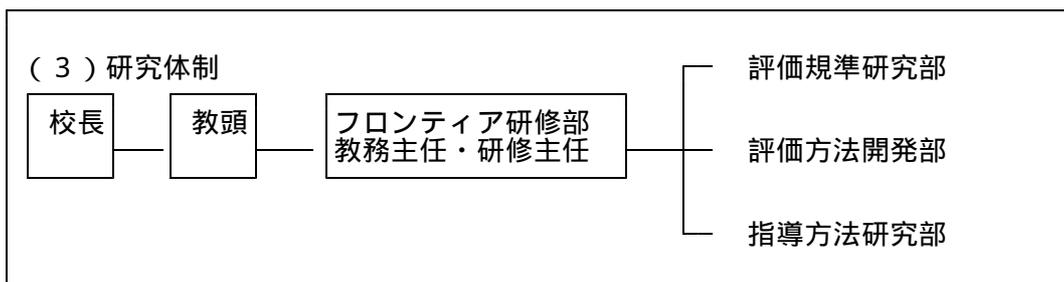
平成14年度	
--------	--

平成15年度	<p>テーマ 「分かる授業」で確かな学力の定着を目指して</p> <p>研究の見通し（仮説）</p> <p>(1) 5年生・6年生で算数科を教科担任制及びTTで実施し、個に応じたきめ細かな指導の展開を工夫し、確かな学力を定着させることをねらう。教科担任制をとることで、算数科の教科担任として計画から実践まで集中的に取り組めるため、個に応じた指導や評価の実践が効率的にできる。算数科に専念して深く教材研究ができるため、子どもの学習意欲を喚起する授業が展開できる。同一学年で同一歩調で授業が進められるため、学級間の格差を少なくできる。</p> <p>(2) 全学年の算数科の各単元の評価方法の工夫と指導方法の改善を行い、目標の実現状況を把握する。</p> <p>研究内容・方法</p> <p>(1) 効果的な教科担任制およびTT指導のあり方、教材開発、発展・補充学習の工夫に取り組む。加配教職員1名は6年生3学級の算数科の教科担任として、1学級あたり週4・3時間担当する。また、5年生3学級でも算数科のTTとして1学級あたり週2時間担当する。算数の教科担任として5・6年生の算数科の授業計画や教材研究から実践までを中心となつてすすめる。</p>
--------	--

	<p>学力向上や意欲についての評価については</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元の終末ごとに意欲関心のアンケートを行う。 ・C R Tを2回実施し比較分析して、研究の成果の検証を行う。 <p>(2) 全学年の算数科の評価規準を見直し判断基準を設定する。一覧表を作成し目標の明確な授業を展開し学力の把握につとめる。単元ごとに総括したA B Cの割合を算出する。それらのデータをもとに指導方法の改善をはかる。</p>
--	---

平成 16 年度	<p>テーマ 確かな学力を育てる学習指導のあり方 ~ 算数科における評価の工夫改善を通して ~</p> <p>研究の見通し(仮説) 確かな学力を定着させるために、多様な指導方法・学習形態について工夫し、指導と評価の一体化によって授業の改善を常に行うことが必要とされている。本校では、子どもに身につけさせたい力を評価規準として明確に掲げ、児童の良い点や進歩の状況を積極的に評価し、児童自身が学習の過程を振り返り、新たな自分の目標や課題を持って学習を進めていけるような評価をすることとしている。このことが、新たな指導方法の開発につながり、児童の学力向上に資することになると考える。 そこで、児童の学習の到達度を適切に評価し、その評価を指導に生かすことや評価の客観性という点について重点的に研究を進めていく。 〔平成15年度の(2)の研究を引き続き行う〕</p> <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導の改善に生かす評価の在り方(学習指導要領に定める目標等の実現状況の把握) ・客観的な評価(明確な判断基準の作成) ・学習過程を重視した評価場面と評価方法 ・評価のフィードバックの方法 ・自己評価、相互評価 ・関心・意欲・態度の評価の在り方 ・補充的な学習、発展的な学習
----------------	--

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

<p>(1) 教科担任制及び効果的なT T指導のあり方について</p> <p>5・6年生の算数を教科担任制で実施した。教科担任制でT T指導の効果的なあり方や少人数指導などにも取り組み、児童の学習意欲の向上を図ったり、個に応じたきめ細かい指導をしたりすることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・T 1とT 2が授業の中で役割分担を明確にして、授業を円滑に進める指導の工夫をした。 ・C R Tは平成15年4月と平成16年2月に実施。学力の向上の程度の分析結果は最終報告で提出予定。
--

- ・単元末に毎行行った算数の授業や内容に関するアンケートは現在分析中。結果は最終報告で提出予定。

- ・授業形態の工夫を行った

9月、5年生『小数のかけ算とわり算』の単元では17時間の指導計画のうち14時間はTTで斉指導し、最後の3時間を課題の習熟を目指して、一つの学級を2グループに分けて2教室で授業を実施した。コースは自分の力でどんどん問題を解決したい子どもたちの『サイクリングコース』。もう一方はゆっくりと基本的なことを確実に押さえたい子どもたちの『ウオーキングコース』とした。コース選定にあたっては、趣旨の説明を聞いた後、子どもたち自身が(保護者と相談)決定するようにした。『サイクリングコース』では多くのプリントに取り組んだり発展的な課題に挑戦するようにした。『ウオーキングコース』ではゆっくりと説明を聞いたり一緒にじっくりと考えたりする授業を展開した。

指導後、子どもたちにこれらの形態に対するアンケートを実施した。結果は以下のようであった。

質問	ウオーキングコース % (64人)			サイクリングコース % (42人)		
	はい	変わらない	いいえ	はい	変わらない	いいえ
ペースにあっていましたか	78	16	6	76	24	0
内容はよくわかりましたか	77	19	4	72	26	2
授業は楽しかったですか	61	28	11	86	14	0
質問や発表はできましたか	41	41	18	38	41	21
このようなコースでまたやりたいですか	83	9	8	88	10	2

コースの中の答えの「はい」「変わらない」「いいえ」とは、コースに分かれる前の斉指導とコースに分かれての指導を比較しての答えである。

この結果から自分のペースでの進め方ができる少人数での習熟度別指導形態は子どもたちには好評であった。この結果をふまえ、6年生でも2月に6学年のまとめをこのような形態で実施している。

(2) 全学年の算数科の評価規準を見直し判断基準を設定する。一覧表を作成し目標の明確な授業を展開し学力の把握につとめる。単元ごとに総括のA B Cの割合を算出した。それらのデータをもとに指導方法の改善に役立てた。

子どもに育てたい力としての「目標」を明確に見据えた単元全体の具体的な学習活動を、はじめにきちんと計画することが、評価や評価方法を決定する第一歩である。評価規準とは、指導や目標を反対側からとらえ直したもので、評価規準が明確でないということは、目標も明確でないと言える。常に目標と評価は表裏一体であり、指導と評価の一体化を目指した実践が本研究の目指すところであるととらえている。

そこで本校では、評価規準の作成と単元全体を見通した具体的な評価の判断基準を示す作業を行った。そして、その計画に則った授業実践を行い実現状況を見取り表に記録していく、ということを通理解の第一歩としてスタートした。

単元の指導計画に評価の判断基準や評価方法を事前に計画的に盛り込むことにより、目標をしっかりと意識した授業が展開できるようになってきた。現時点では、評価方法はワークシートやノートなどに考え方や学習内容を記録したもので見取ることが多い。これらをじっくりとていねいに見ていくことで、児童一人ひとりの目標の実現状況をより把握して適切な指導や対応につながるようになってきた。また児童の発言や行動などを見取るときにも、活動の様子をつぶさに見ようと、注意深くきめ細かく対応する姿勢が身に付いてきている。

2. 今後の課題

- (1) TTなど複数の教員で指導していくことで効果を上げる研究は進んだが、全校的な取り組みとして、算数科の学力を向上する研究までには至っていない。
- (2) 授業を進めるにあたっては、しっかりとした計画性をもとにした具体的な「目標」や「授業構想」を欠いた評価の判断基準は使い物にならない。つまり、評価方法の工夫の研究とは、授業作り、すなわち指導方法の工夫改善が不可分に伴うことを再認識したところである。
しかし、客観的な評価について、まだ十分に深めた実践にはなっていない。見取った児童の学力を次の指導に生かす工夫も不十分である。
- ・評価A・Bの児童への発展的な学習への取り組み
 - ・評価Cの児童の補充的な学習への取り組み

観点別評価規準や評価基準を作成し、その運用を通して新学習指導要領の目標等の実現状況の調査をおこない、適正な評価規準であるかの研究を行うが、妥当性・信頼性のある評価を目指したい。

そのための時間の確保が必要である。

意欲・関心・態度などの情意面の評価の判断基準の作成には最も悩むところであるが、やはり学年に応じて感想等を工夫して書かせることが有効であるように思われる。しかしそれだけで終わるのではなく、生活の中での体験なども注意深く見守り評価していくという、多面的、長期的な評価をしていくことが必要であると考えている。

今後の課題としては、ノートやワークシートでのつぶさな見取りにはかなりの時間を要するため、評価に追われるようになりがちであること。特に情意面などにおけるより効果的な新しい評価方法の開発までには至っていないということ。また、実際に授業を展開してみると、はじめに計画した判断基準では十分に見とれない時も多々あることなどが挙げられる。

学力等把握のための学校としての取組

- ・CRTの実施
- ・単元末の学習内容に関するアンケート
- ・単元ごとの目標の達成状況の把握
- ・内容のまとめり(領域)ごとの目標の実現状況の把握

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- * 研究会、説明会等の開催実績
- ・平成15年 7月 4日 6年生授業研究会 藍住町内フロンティア校(藍住北小, 藍住中学)鳴門教育大学助教授 服部勝憲先生, 西原指導主事を招いて
 - ・ " 10月31日 6年生授業研究会 高知県嶺北地域教育委員の視察
 - ・ " 11月 7日 5年生授業研究会 藍住町教育研究部指導方法の研究部会
 - ・平成16年 2月 5日 5年生授業研究会 中村武志先生を招いて
 - ・ " 2月12日 算数科理論研究会 鳴門教育大学助教授 服部勝憲先生を招いて
- * 研究会、説明会等の開催予定
- 平成16年 11月 学力向上フロンティア校として研究発表会予定

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 6学級以下 7～12学級
 13～18学級 19～24学級
 25学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 一部教科担任制 その他
- 【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無